

○長期予報及び台風18号情報について(9月30日 9時現在)

台風16号では、宮崎県南部で暴風、北部で記録的な豪雨による被害が発生しました。近年の傾向として、10月にも台風が接近・上陸することが多くなり、まだしばらくは警戒が必要です。

今年は、平均気温が高い傾向が続いていますが、その要因として、依然として太平洋高気圧(サブハイ)が強く、16号通過後も一旦南に後退したものの、9月23日頃からその勢力を日本の南海上から西日本まで覆う形になったことから、秋雨前線の南に位置する本県は、蒸し暑さと熱帯夜になっています。

それでも季節は進んでいますが、この時期、気象庁から重要な長期予報が出されますので、今回は長期予報について解説します。

1 予報の種類と予報の見方

(1) 予報の種類

短期予報・・・2日以内の予報。午前11時に出される予報が、当日、翌日、翌々日の天気予報に該当します。

中期予報・・・7日以内の予報。週間天気予報のことで毎日11時更新。

長期予報・・・1ヶ月、3ヶ月予報。毎月25日前後に出されます。

(2) 予報の見方

1ヶ月予報は、その月を3区分して、気温、降水量、日照時間の3つについて予想されます。

現在、1981年～2010年の30年間のデータで平年値が出されています。そのため、たとえば気温、降水量、日照時間は、次の表のように表現されます。

表現	低い(少ない)	並	高い(多い)
出現率	30(%)	40(%)	30(%)
意味	平年値と比較して、どの出現率が高いかを表現する		

たとえば、平年並みが予想される場合は上記の表現になります。左の30は平年よりも低い(少ない)傾向、右の30は平年よりも高い(多い)傾向と表現されます。40は平年並みの気温ということになります。

3ヶ月予報は、その期間の気温と降水量について、同じ形式で表現されます。

(3) 暖候期予報・寒候期予報

暖候期予報は例年3月に4月～9月の大まかな天気傾向とその年の夏(6月から8月)の3ヶ月平均気温、降水量の予報になります。

寒候期予報は、例年9月に10月から翌年3月の大まかな天気傾向とその冬(12月から翌年2月)の3ヶ月平均気温、降水量の予報になります。

2 2016年(平成28年)の10月以降の長期予報について

(1) 1ヶ月予報(9月29日発表)

表の見方は、最上段の気温は、予報期間の1ヶ月を通じての傾向を示したもので、その下の10/1~は10月1日から1週間の傾向で、この数字から平年よりも高い(暑い)予想になっています。降水量、日照時間は1ヶ月を通じた予想です。以下同じように読んでください。

気温	20	30	50
10/1~	10	10	80
10/8~	30	50	20
10/15~	20	40	40

降水量	20	30	50
-----	----	----	----

平年並みかやや多い。

日照時間	40	40	20
------	----	----	----

平年並みかやや少ない。

第1週目が高いが、第2週目が平年並。
第3週目以降平年並みかやや高いに。

(2) 3ヶ月予報(9月23日発表)

気温	30	40	30
10月	20	30	50
11月	30	40	30
12月	40	40	20

降水量	40	30	30
10月	30	30	40
11月	40	40	20
12月	30	40	30

気温は平年並みになるが、10月はやや高い傾向。12月はやや低い。

降水量は、平年並みかやや少ない。

(3) 寒候期予報(9月25日発表)

平成28年12月~29年2月)

気温	40	40	20
----	----	----	----

降水量	30	40	30
-----	----	----	----

気温はラニーニャ現象に伴い、平年並かやや低い傾向。寒い冬を予想。

平年並みの気温の時は、冬晴れの晴天傾向になりやすい。

3 総括

長期予報から、28年10月は、まだ暑さが残る傾向ですが、11月に入ると平年並みの気温、降水量、日照時間が予想されます。その後12月から2月の冬の期間はラニーニャ現象が持続するため、平年並みかやや寒い冬が予想されることとなります。ただし、長期予報は期間が長くなれば、それだけ精度が落ちてきますので、全体的な傾向として把握してください。

4 その他

台風18号が発生し、17号よりも北寄りのコースで、来週の始めにも九州から本州にかけて接近上陸する可能性がありますので警戒してください。

5 台風18号情報(9月30日 9時現在)

台風16号に続いて、18号が日本に接近または上陸する可能性が出てきましたので、今後の予想進路等について、気象庁のデータに基づいて解説します。

(1) 勢力について

台風16号の場合、九州に接近する前に中心気圧が950 945と再発達し、目もはっきりしていたため、非常に強い勢力で宮崎の南部海岸線を北東に抜け、影響が大きくなりました。

台風18号の場合は、勢力が16号とほぼ同じ勢力ですが、規模はやや小さいです。最盛期で930 hPa、最大風速50 m、暴風半径100 km程度が予想されます。九州の北側に偏西風があるため、転向点を過ぎるとスピードを加速しながら進む予想です。

(2) 進路について

気象庁、米軍台風センター、ヨーロッパ中期予報センターの3つ予想は、九州の南海上(種子島付近)から四国沖のコースで揃ってきました。

ここでは、気象庁の予想進路に基づいた影響について説明します。

【気象庁予想進路】

沖縄本島の東海上から北上し、奄美大島近海に進み次第に進路を北北東に変え、九州南海上をかなり接近しながら四国沖へ向かう進路になります。

ただし、太平洋高気圧の勢力が強い状態が持続する場合は、進路を北寄りのまま北上する可能性が残っています。この点は、最新の情報を入手してください。

(3) 影響

【台風16号と比較した場合】

勢力は、ほぼ同じで非常に強い勢力まで発達します。最接近の時は、台風の勢力に注目してください。進路が16号よりもやや東側になるため、影響は少し小さくなりますが、警戒が必要です。

規模は16号より少し小さいため、影響する地域がせまくなります。

風は、宮崎市で、最大風速15~20 m 最大瞬間風速25~30 m、県南沿岸部で最大風速20~25 m、最大瞬間風速30~35 m程度と予想されます。

雨は16号と比べ、降る時間がやや短いことやコースが東寄りになる可能性が高いことから、県北部が中心になります。宮崎県の場合、台風の風が東から南東の時、九州山地に向かって吹くことになり、吹き付け効果(強制上昇)が出るため、雨量が多くなります。

しかし、台風が本県の南東海上から東海上に進んだときは、北から北西の風に変わるため、風雨とも弱まってきます。

県全域で、150~200 mm、所により300 mmが予想されます。

16号で、500 mmを超えた地域もあり、今回の雨でさらに危険性が増す可能性がありますので、厳重な警戒、早めの避難を心がけてください。

なお、必要に応じて、今後も随時情報を提供していきます。

総合農業試験場企画情報室 村岡精二(気象予報士)